

<前回：オリエンテーション・導入>

A. テーマ：「旧約聖書と哲学的問い」

B. 目的

キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて。

D. 確認事項

・受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（火3・水5）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

・成績はレポートによる。

<導入>アブラハムと哲学

1. 関根清三「近代日本の哲学と聖書解釈—和辻哲郎と西田幾多郎の場合—」

（『理想』2018 N.701、理想社、4-16頁）。

「アブラハムが神に愛児イサクを献げようとする、謂わゆるアケダーのテキスト（『創世記』二二章一—九節）、「哲学者は、これを合理的に読み解くことに腐心してきた。」

「このような理不尽な神は本物かどうか分からないから従わないとアブラハムは応えるべきだったと、テキストそのものを改変しようとしたカント」

「逆に倫理的なものの目的論的停止をした信仰の騎士アブラハムを讃えて、その非倫理性を等閑に付してしまったキルケゴール」

「あるいはアブラハムは例外者だが、普通の我々に神はこのような非倫理的な要求をしないと常識的な線で休心しようとしたブーバー」

「この神は人一般を指し、唯一絶対の一人の人が他の人との関係を断つことを要求するのが対人倫理の本質だと神人関係を人間関係へとずらして換骨奪胎したデリダ」

「その読解はどれも十分な説得力を持つようには見えない。」

「それに比べ、西田の方向の解釈は解釈史上唯一、このアケダーの真髓を剔抉し、正面から謎を解くものではあるまいか」、「この神は自己否定の神であり、己の善性を否定し子殺し教唆という極悪にまで下り、そのことによって、そもイサクを彼に与えた贈与者である神を忘却しイサクを私物化していたアブラハムの罪を超克するように誘ったのだ、と解するのである。」（7頁）

2. 関根清三『旧約聖書と哲学——現代の問いのなかの一神教』岩波書店、2008年。

「歴史学的な説明が、テキストの第一義的な衝迫力に富むメッセージを、正面から受け止めないで、単なる客観的な解説に墮することを恐れるのである。論者が敢えて哲学的な主体的な考察を試みた、主たる動機はここにある。」

「哲学的解釈」「歴史学的解釈」

「両者の相補性の必要を確認しつつ、しかしここでは特に、従来旧約学が無視ないし忌避しがちだった、哲学的な解釈の重要性を強調したことをお断りしておきたい。」（42）

4. 西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」（1946年）（全集十一巻、『自覚について 他四篇 西田幾多郎哲学論集Ⅲ』岩波文庫）

1. 創造論とギリシャ哲学

- ・「ユダヤ思想 → キリスト教思想」：聖書（旧約）とギリシャ哲学
- ・ヘレニズムとヘブライズム、存在論と聖書の最初の本格的な接点としてのヘレニズム・ユダヤ教、そのキリスト教への影響
- ・宇宙論的問題の地平における相互関係→対話と論争の可能性（自然神学）
- ・ユダヤ教とキリスト教との関係：ユダヤ教はキリスト教の母体である。
 - キリスト教への多層的・多面的な影響
 - 聖書とギリシャ哲学との関連づけというキリスト教教父の課題の先駆者

(1) 在りて在る者

1. 「3:13 モーセは神に尋ねた。「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがいません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」
14 神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」
15 神は、更に続けてモーセに命じられた。「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえにわたしの名／これこそ、世々にわたしの呼び名。（出エジプト）

וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים אֶל-מֹשֶׁה אֲהִיָּה אֲשֶׁר
אֲהִיָּה וַיֹּאמֶר כֹּה תֹאמַר לְבְנֵי
יִשְׂרָאֵל אֲהִיָּה שְׁלַחְנִי אֵלֵיכֶם

2. 山田晶『在りて在る者』創文社、1979年。

まえがき

- 一 在りて在る者 序論
- 二 在りて在る者 トマスの解釈
- 三 在りて在る者 アウグスティヌスとの関係
- 四 在りて在る者 アウグスティヌスの解釈
- 五 無からの創造 その思想の形成
- 六 神と世界 創造における神の意志
- 七 非有のアイデア 創造における自由の根拠
- 八 自然神学

あとがき

3. LXX：ト・オンではなく、ホ・オン

4. 創造の知恵、あるいは知恵による創造

- ・世界に内在する法則性への信頼→神への信頼＝「神への畏れ」

知恵思想は創造論を前提とし、それを展開する内容をもっている。この点は、下に引用した箴言8章において、神が天地創造に先だって、最初に「知恵」を創造した。

- ・神の創造行為の探求と称賛としての科学 → 自然を通じた神の讃美

→ 自然神学(書物としての自然)

<箴言> 1:7 主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも諭しをも侮る。8 わが子よ、父の諭しに聞き従え。母の教えをおろそかにするな。8:22 主は、その道の初めにわたしを造られた。いにしへの御業になお、先立って。23 永遠の昔、わたしは祝別されていた。太初、大地に先立って。

11:1 偽りの天秤を主はいとい/十全なおもり石を喜ばれる。2 高慢には軽蔑が伴い/謙遜には知恵が伴う。3 正しい人は自分の無垢に導かれ/裏切り者は自分の暴力に滅ぼされる。4 怒りの日には、富は頼りにならない。慈善は死から救う。5 無垢な人の慈善は、彼の道をまっすぐにする。神に逆らう者は、逆らいの罪によって倒される。9 神を無視する者は口先で友人を破滅に落とす。神に従う人は知識によって助け出される。

<詩編> 19:2 天は神の栄光を物語り/大空は御手の業を示す。3 昼は昼に語り伝え/夜は夜に知識を送る。4 話すことも、語ることもなく/声は聞こえなくても 5 その響きは全地に/その言葉は世界の果てに向かう。そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。

(2) 無からの創造

<創世記1> 1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

5. ヘレニズム世界への展開 → ヘレニズム文化との交渉・論争
論争の場としてのコスモロジー
プラトンの世界創世論(『ティマイオス』)
デミウルゴス、イデア界、素材、善

6. 神・創造の善性と神の絶対性の強調: 救済の確実性

→ 神は何ものにも依存せず世界を善なるものとして創造した

→ 神のみが世界を支配する

7. 「無からの創造」(creatio ex nihilo)の帰結

(1) 悪の問題のアポリア (2) 世界の合理的秩序とその理解可能性

cf. プラトン主義の二世界論、グノーシス主義、マニ教

↓

世界全体・現象世界を科学するということの動機付け

世界のすみずみまで合理的な法則が行き渡っている。この合理的な法則は人間の理性によって理解できる。両者は共に、神の被造物だから。

もし、反合理的な悪が世界を支配しているならば、世界を合理的に理解することはできない。

(3) フィロン/アウグスティヌス

<創世記1章>

27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚。空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

<創世記2章>

7 主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。8 主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。

(a) アレクサンドリアのフィロン (BC.25-AD.45/50)

8. 二段階創造論：『世界の創造』(教文館)

「およそ存在しているものは、「能動的原因」と「受動的なもの」とからなる」「能動的なもの」とは全世界を統べる「知性」(ヌース)、「受動的なもの」とは、それ自体としては生命(魂)を持たず、また自ら動くことはできないもの」(12)

「父なる創造者(デーミウールゴス)が「生まれたもの」に配慮するのは理の当然」(13)
「この世界は六日間で作られた」(13)、「生成するもの」の方が「秩序」を必要としたから、「秩序」に欠かせないのは「数」、「奇数は男性、偶数は女性」「完全数「六」」(14)

「神は、「巨大都市」(メガロポリス)をつくらうとして、まず都市の様々な部分の原型を構想した。つまり神は、その原型を素材にして、「可知的な世界」を構想した上で、それを手本として用いながら「可感的な世界」も仕上げたのである。」(15)

「今つくられた人間は、可感的であり、かくして性状を持っており、身体と魂とから成り、男か女かであり、本性的に死すべきものであるが、これに対し、神の似像になぞらえてつくられた人間の方は、ある種のアイデア、類、印章であり、可知的な非物体的であり、男でも女でもなく、本性的に不滅だからである。」(52)

第一創造物語→可知的人間(人間のアイデア)／第二創造物語→可感的人間(土の塵)
神の像

↓

キリスト教におけるプラトニズムの受容、聖書のアレゴリカルな解釈の影響。

アウグスティヌスによる創世記注解

9. フィロンのロゴス論

「フィロンのロゴス論の真の意図は、伝統的なヘブライ的の神観から、神と世界、啓示と理性、信仰と哲学との二つの異質の原理が、なんらの第三者的中間者を媒介し、あるいはまた直接的に連続することなく、それぞれ絶対的断絶性を保持しつつ、しかも相互に関係しうる原理を確立することであったとみるべきであろう」(平石、285)、「神は世界を創造し、摂理をもって支配するが、世界もまたこのような神的生命の創造過程に参加しているのである。フィロンはこのような神と世界との「非連続の連続」の関係を成立せしめる原理を、象徴的相関性としての「神のロゴス」として把握したのである」、「ロゴスの二重性」、「フィロンの「ロゴス」は神の世界創造の宇宙論的原理である」というのであろう」

(286)、「第二に、神がこのような純粹思惟内容の中から、この感覚的世界の範型として、自己の外部に表出したいわゆるアイデアの総体としての「英知的世界」を意味する。フィロンが本来の意味で「神のロゴス」と呼ぶところのものは、この第二の意味の「ロゴス」であること」、「フィロンはアイデアをプラトン哲学の本来の意味で理解し」(286-297)、

「第三に、以上「英知的世界」の模写としてのこの感覚的世界が造られたということは、「神のロゴス」がこの世界に内在化され、「世界法則」、あるいは「人倫の原理」として、万物を結合、保持、存続せしめる力として働くことを意味するのである」(287)。

「フィロンがプラトンから学んだ「範型—模写」の図式は、世界創造における創造者と被造物との根源的な象徴的関係性を示す基本的図式として、新たな意味が付与されるに至ったのである」(288)。

(b) アウグスティヌス(354-430)

「アウグスティヌス、意志の最初の哲学者」「彼は、生涯、哲学に固執したことによって最初のキリスト教哲学者になったのである」(ハンナ・アーレント『精神の生活 下 第

二部意志』岩波書店、102)。

10. 『創世記逐語註解』(『アウグスティヌス著作集16』教文館)

訳者(片柳栄一)解説

「アウグスティヌスは創造の二つの段階ともいふべきものを考えており、第一のものを、「初めに、神は……」が示し、第二のものを「光あれと神は言われた」という言葉が示しているとする。……原初にあるものによって、神に由来するが、なお不完全な被造物の始めが暗示され、御言葉であるものによって、創造者へと呼び出された被造物の完全性が暗示されている。……御父に常に変わずよりすがり結合して御父とまったく同一である形相を、おのおのの類に応じて倣うことによって、被造物は完全に形成されるのである。」(366)

「靈的被造物は forma なる神の御言葉を認識することによって形成されるのである。認識が存在の本質に属しているのである。決して形成されたことを認識するというのではなく、神の御言葉の認識が形成なのである。そうした在り方が、彼によれば、物的存在と區別された靈的被造物の特性なのである。」(367)

「この創造の二つの段階は、時間的區別ではないことである。」(368)

「創造という考えの根本にあるのは、被造物の創造者に対する関係の、絶対依存的性格である。しかもその依存は外的である。」(370)

「アウグスティヌスも二つのテキストの顕著な相違に気づいている。」「アウグスティヌスはこの箇所を創造についての繰り返しの言葉とは考えず、ここまで暗示的に示してきた創造の二つの異なった次元についての彼の説、つまり創二・三までは原因的理拠の創造について述べているのに対し、二・四以降はこの理拠に基づく具体的事物の創造、展開と述べているとする考えを聖書の言葉に対応させてより詳細に開陳する。」(382-383)

11. 『告白』(山田晶責任編集『アウグスティヌス』中央公論社)

第11巻、12巻

「あなたとひとしく永遠なる御言によって、語りたもうすべてのことを、同時にかつ永遠に語りたもう。そして、あなたが生じるように語りたもうすべてのものは生じ、しかもそれは、あなたが語ることによってお造りになるままに生じます。」(7/408a)

「神よ、あなたはこの始原において天地をお造りになりました。すなわち、御言において、御子において、御力において、あなたの知恵において、あなたの真理において、奇しきしかたで語り、奇しきしかたで造りたもう。」(9/409b)

「時間がなかったところには、「そのとき」などもなかったのです」、「あなたの年は、すべてが同時にたちどまっています。」(13/413a,b)

「あなたは、あなたから出る始原において、あなたの実体より生まれた知恵において、何ものかを無からお造りになりました。」(12・7/444a)

(4) 芦名定道「現代思想と〈神〉の問い—ティリッヒからジジェクまで—」

(理想社『理想』No.688、2012年、40-52頁)

12. ティリッヒ『聖書の宗教と究極的実在の探究』

聖書的な思惟とギリシア的哲学的な思惟(形而上学)との差異性あるいは緊張関係を明確にした上で、「両者が究極的な一致と深い相互依存性を有している」点を明らかにする。

13. 「自らを問う存在者」、「有限性の中で存在を問う存在者」としての人間→存在論「存在するものの諸領域における存在の現前とその諸構造」についての「存在論的分析」。

14. 聖書の宗教と存在論との決定的な相違。聖書の「人格主義」(personalism)。

「人格」とは、「自己自身と、また世界とに関係づけられ、またそれゆえに、理性、自由、そして責任を伴う」、「人間的領域での個別性」。

人格主義：神を個別性において、つまり、「一存在者」として経験する。

存在論的思惟によって構成された神概念＝「存在自体」(Being-itself)：

「存在する一切のものに現前し、一切のものは存在に参与」(ibid., 368)、存在論的な問いにおいて、人格的な神の個別性は超越される。

15. 神と人間の人格的關係：自由な相互性に基づいており、「聖書の宗教の動的な性格の根源」を成している。神の人間創造は自由な人格としての人間存在の創造であり、こうして人間は創造の善性にも関わらず、墮罪の可能性をも有する自由な主体となった。
16. 祈りという宗教的行為：聖書的な人格の相互性は、存在論的神観念(形而上学的な神)に矛盾する。自由な相互關係が時間、空間、因果律、実体といったカテゴリー内部で成立するのに対して、存在自体はこれらのカテゴリーを超越している。
17. 言葉：「人格と人格との關係性は言葉を通して現実となる」。啓示は言葉による神の語りかけであり、人間は聴くように求められる。これに対して、「存在論は別のカテゴリーで思考する」(ibid., 369)。人間と存在自体との關係は直接的であり、言葉によって媒介されるものではない。
18. 聖書の宗教と存在論的思惟との相違また対立を前提としつつも、ティリッヒは、聖書の宗教も存在論的問いを免れることはできないと主張する。たとえば、「あらゆる真の祈りにおいて、神はわれわれの祈る相手であると同時に、われわれを通して祈る者である。なぜなら、神の靈こそが正しい祈りをつくり出すからである」(ibid., 387)。その意味で、神は人間にとって、その人間自身よりもさらに近い關係(直接的な)にある。祈りにおける神は、通俗的な人格イメージを越えた存在であり、むしろ存在論的思惟と接する地点に立っている。
19. 「存在論的な問いを問うことは避けられない課題である。パスカルに抗して私はいう、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と哲学者たちの神とは同じ神である。神は人格であり、また同時に、人格としてのそれ自身の否定である。」

↓

「人格」とは何か。

<参考文献>

1. 荒井章三・森田雄三郎『ユダヤ思想』大阪書籍。
2. 市川裕『ユダヤ教の歴史』山川出版社。
3. 秦剛平『乗っ取られた聖書』京都大学出版会。
『ヨセフス——イエス時代の歴史家』ちくま学術文庫。
4. 秦剛平訳『七十人訳ギリシャ語聖書』全5分冊、河出書房新社。
5. ヨセフス(秦剛平訳)『ユダヤ戦記』全7巻、『ユダヤ古代誌』全20巻、『アピオーンへの反論』、『自伝』山本書店。
6. 平石善司『フィロン研究』創文社。
7. グッドイナフ『アレクサンドリアのフィロン入門』教文館。
8. 土岐健治『初期ユダヤ教研究』新教出版社。